

2016/11/12

明治大学社会科学研究所公開シンポジウム

▶ 北海道農業の対応

▶ ～われわれがいま、考えていること～

▶ 東山 寛

▶ (北海道大学農学部／大学院農学研究院・准教授)

われわれの受け止め

- ▶ ①仮にTPPが発効しても、それが「この世の終わり」というわけではないので、われわれとしてはきちんと政策要求をしつつ、それを受け止めていくしかない。
- ▶ ②稲作・畑作・酪農の「三本柱の農業」を特徴とした北海道農業は、戦前・戦後を通じて何度も「痛い目」(あわや「安楽死」)にあってきたのであり、基本的には打たれ強い(と信じる)。
- ▶ ③しかし、図体の大きな「土地利用型農業」は、そう簡単に「変わり身」がきかず、急激な変化には耐えられない。畑作であれば、「輪作農業」という基本線は変えられないが、10年後、20年後を見越した対応策はきっとあるはず。

われわれの懸念

- ▶ ①しかしながら、関税の撤廃や大幅な削減（国境措置の後退）により、政府試算も否定していないように、価格が下落し、農業経営の再生産ができなくなるのではないか、という懸念はもちろんある。
- ▶ ②関連して、政府が「対策」を打つとしても、そのための財源の確保も難しいのではないか、それにより保護水準も切り下げられるのではないか、という懸念も大きい。
- ▶ ③TPPの発効にはまだ時間がかかるのかもしれないが、先行きへの不安から、農業の担い手の確保が難しくなるのではないか、という懸念が実はいちばん大きい。これが真っ先に来る問題だろう。

北海道農業の担い手をめぐる実情

－農家数は減らしすぎ、子供の数も減り過ぎ－

表 農家戸数・農家人口の動向（北海道、販売農家）

（単位：戸、人、％）

	販 売	農 家	戸 当 た り	年 齢 階 層 （ 3 区 分 ） 別 農 家 世 帯 員 数		
	農家数	世帯員	世帯員数	14歳以下 （年少）	15～64歳 （生産年齢）	65歳以上 （老年）
1990	86,704	376,565	4.3	66,298	235,495	74,772
1995	73,588	311,711	4.2	48,189	188,365	75,157
2000	62,611	261,160	4.2	34,441	153,703	73,016
2005	51,990	211,929	4.1	23,905	122,633	65,391
2010	44,050	172,779	3.9	18,854	98,663	55,262
2015	38,086	...	...	...	...	...
減少率 (2010/1990)	49.2	54.1	—	71.6	58.1	26.1

（資料）農業センサス（各年次）、農業センサス累年統計書（平成15年）

ヤマを失った農家人口、痛恨の極み

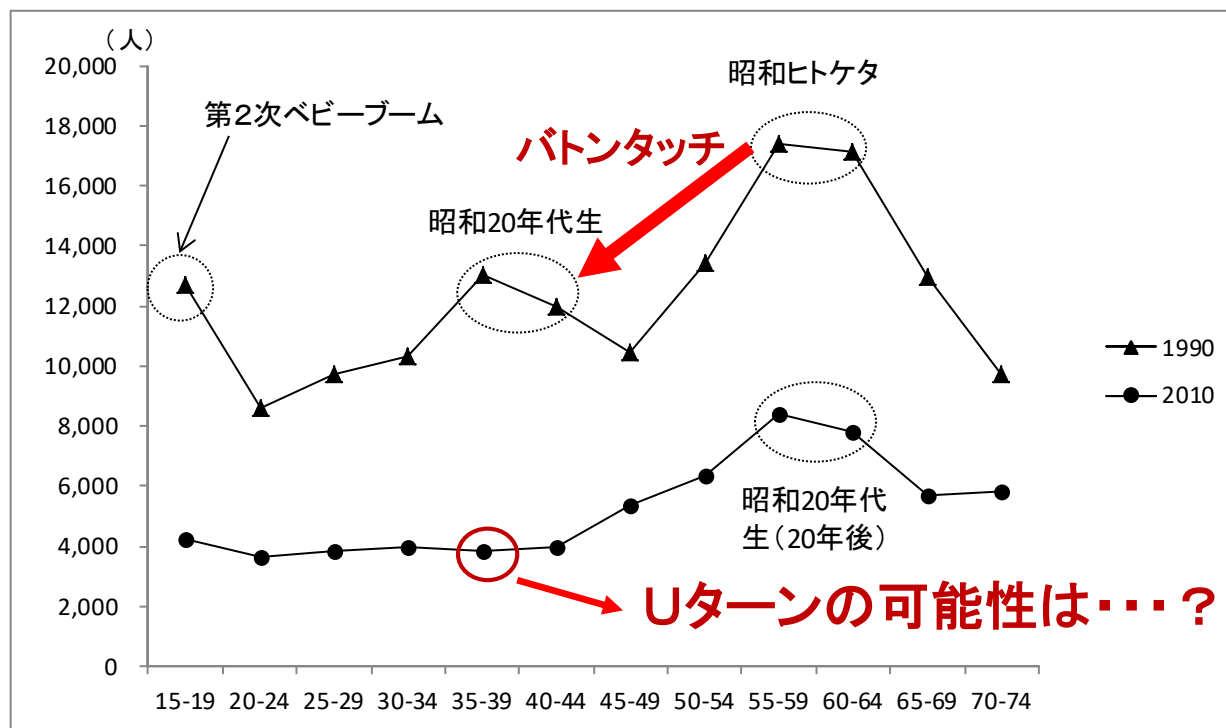


図 年齢階層別の農家人口の動き（北海道、男子）

（資料）農業センサス

（注1）1990年は総農家、2010年は販売農家の数値。

（注2）1990年の「70～74歳」の数値は、1995年センサスの掲載値。

（注3）14歳以下と75歳以上は図示せず。

現状（畑作・酪農中核地帯） 最も恐れているのは「人が減る」こと

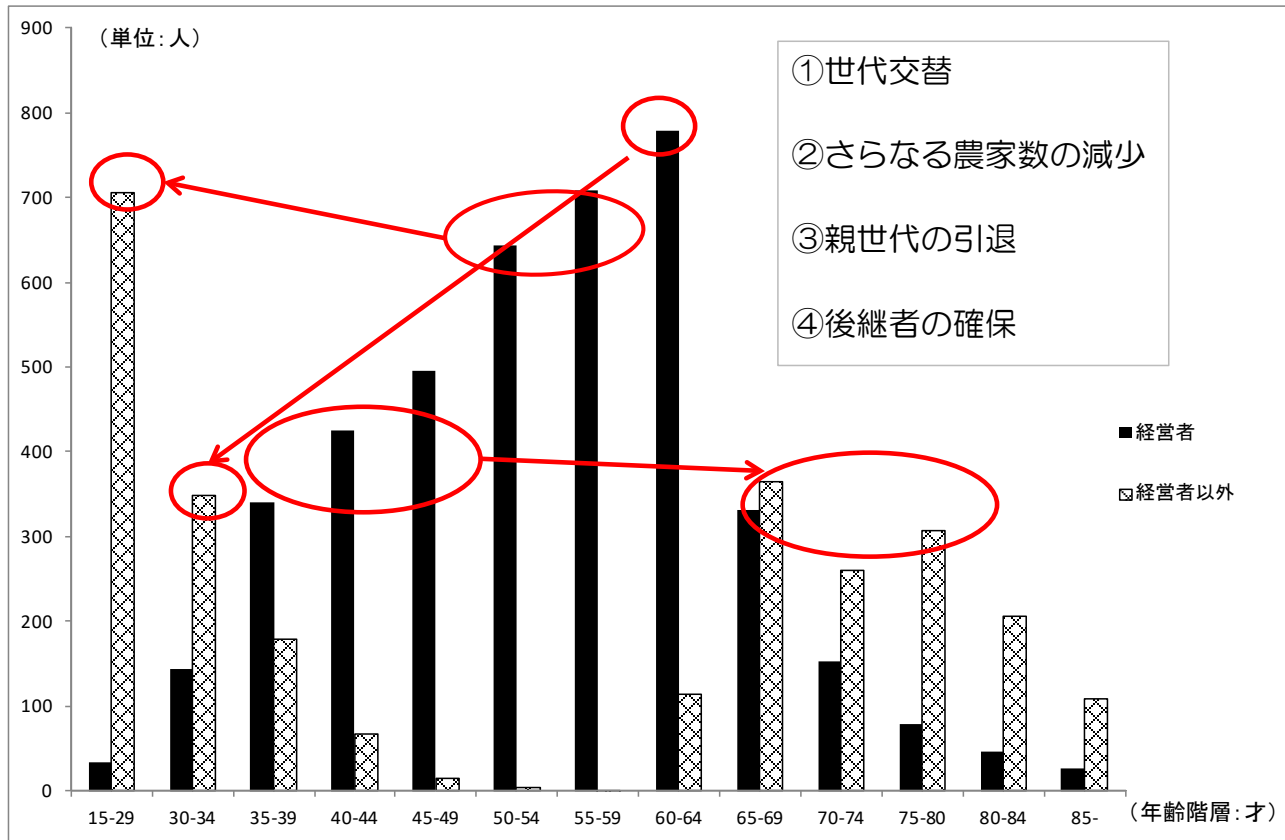


図 農業者の年齢構成（オホーツク管内、2015年）

（資料）農業センサス（北海道農政部公表、最終更新2016年7月5日）

（注1）販売農家の経営者（4,205人）、農業就業人口（6,888人）の数値であり、いずれも男子。

（注2）経営者以外は、農業就業人口から経営者の人数を差し引いて算出。

われわれのチャレンジ

- ▶ ①農家数のさらなる減少は避けられないが、耕作放棄を出すわけにはいけないので(供給責任がある)、テクノロジーを駆使してでも耕作能力を高めるしかない。
- ▶ ②万国共通の農業形態でもある畑作・酪農について言えば、アメリカは桁違いでお手本にならないが、大陸ヨーロッパなどには、われわれの10年後、20年後の姿があるかもしれない。
- ▶ ③われわれが世界の最先端と言うつもりはないが、畑作・酪農は既にEU並みに達しており、ヨーロッパに出来てわれわれに出来ないはずはない！一例を紹介したい。

砂糖の原料になるビートという作物です (北海道畑作では高収益・安定作物)



※2016年10月26・27日開催のビートヨーロッパ2016(フランス・パリ近郊)で報告者撮影(以下、断らない限り同じ)

収穫する（掘り上げる）ところになります
（欧州主流の直播ビートなので尾が長い）



自走式・多畦ハーベスターの導入検討 (写真は欧州最大級の12畦式、6輪)



ワゴン車伴走式の収穫体系 ～収穫効率の飛躍的向上～



★ 体質強化 + 「人が減る」ことへの対応が必要

これも主流の「除土機」です (土を無駄にしない)



大きな土場



★ それほど規模の変わらないドイツ(あの南ドイツでも)ではこのような体系が主流だが、われわれはなぜ遅れているのか？(痛感！)

→ 体質強化の基本線はキャッチアップ



(シートの自動巻き取り)

当然に共同所有・共同利用が中心となります 南ドイツ発祥のマシーネンリングという仕組み



ドイツにおけるMRのアウトライン



搬出・輸送を担うグループも形成されています (才覚のある農業者グループが担うイメージ)



★ 実はわれわれにとっても、輸送・運輸は喫緊の課題

かいま見た家族農業の未来 (写真はいずれもフランス人農家家族)



(3世代で実演を見学)

(ショーを見る親子)



農村の美しさ



(ミュンヘン近郊の農家住宅)



革新技術の導入・利用の条件①－試験段階－ －われわれ（チーム）の研究課題－

- ▶ ①北海道主流の移植ビート用に改造できるか
- ▶ ②関連機械の開発・導入（6畦の移植機、トラクター）
- ▶ ③誰が運転するのか（オペレーターの養成）

茎葉処理（タッピング）の機構とタッピング後のビート



革新技術の導入・利用の条件②－普及段階－ －われわれ（チーム）の研究課題－

- ▶ ④誰が機械をもつのか（所有の主体）
- ▶ ⑤利用の調整をどうするか
- ▶ :ドイツはMRだが、われわれの「**協同のかたち**」は？
- ▶ ⑥さらなる関連機械・技術の追加導入
- ▶ （ワゴン・トラック、巻取機、除土機、**ICT・インフラ整備**）
- ▶ ⑦基盤の整備（道路、大区画化）～まだ「**夢**」の段階